

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494



第五福竜丸元乗組員  
大石又七氏の被爆体験を聞く会

原水爆禁止西宮市協議会主催の「原爆展」では元乗組員の大石又七さんの「被爆体験を聞く会」が開かれた(7月20日)。

退院してすぐ東京に出て来て、現在までクリーニングの仕事をやっています。福竜丸に乗っていたことは黙ってきたんですが、わかるんですね。いろんな形で回っているんです。だから、こういう所に来て、しゃべるといことは、言わなくちゃいけないという気持ちと、今までの思い出がいろいろ残っているものから、いやだという両面があるんですね。だから、今まではほとんど出なかったが、最近になって、私たち自身が、経験したことをだんだん忘れていく以上に、一般の人たちは忘れていくし、事件の後生まれた人はまるっきり知らないことですから、そのことを考えて、この事件は絶対忘れてはいけないと思いますので、何らかの形で事件のあったことを伝えていきたいという気持ちが少しずつ生まれるようになりました。こういう所まで顔を出して、とりとめない話をして申し訳ないと思います。気が持ちは平和を守らなければいけない、一端は自分が責任もって守らなければいけない気持ちがありますので、しゃべらせてもらっています(「第五福竜丸元乗組員・大石又七氏の被爆体験を聞く会」での大石さんの話より)。

※大石さんは「被爆体験を聞く会」で、被ばくの時の模様、帰港までの状況、入院中の心境などについて話をされた。また、展示会場の「福竜丸コーナー」では、無線機、死の灰などと共に、大石さん制作の福竜丸の模型が展示され、地元紙で大きく報道され反響を呼んだ。原水爆禁止西宮市協議会は第五福竜丸の事件を契機として高まった、全市民的な運動の中で結成され、毎年「原爆展」を行なっている。

## 来館者の声から

アメリカの水ばく実験のために島をおわれ、検査に使われる島民が、かわいそうでした。アメリカという国が人だったら、けい察にたいほしてもらいたいです。ビキニの島のほうしゃ能が完全になくなるまで、戦争がなくなり



### ●夏の展示館寸描

◆福竜丸―原爆の図バスツアー―  
青い空、咲き誇る夾竹桃。八月六日八時十五分、久保山愛吉記念碑前で五十人近い青年が静かに頭を垂れ、核実験全面禁止、核兵器廃絶への運動の前進を祈った。  
平和と軍縮をめざす全国連絡会がよびかけた「反核ピースバス」の一行で、この日早朝、第五福竜丸展示館に集合、出発のついで、展示館見学後、バスでアメリカ大使館に要請行動。直ちに実験の停止を、とレーガン大統領宛要請

兵器もすべてなくなるまで、世界の平和はないと思います。死ぬまでに、平和な日が来てほしいです(山口県豊浦郡豊浦町 十二才 小六 浜田盛久)。

七年前、私が初めてここを訪れたのは中学二年。そして大学生となった今、再び訪れました。昔と変わらぬままにこの館があつてよかったです。原発事故が騒がれる今日、この館は黙って愚かな人間達に警告しているかのようにです。

文を手交したあと、一路、原爆の図丸木美術館へ。  
小中学生、家族ともどもの来館者でいっぱい。美術館で、一つ一つたしかめるように原爆の図をみつめ、それぞれ思いを語りあつた。第十三部「米兵捕虜の死」の前に正座して、切々と侵略と差別、日本人の意識、加害者としての責任などを説く丸木俊さんの話しに耳を傾け、草の根からの運動の強化を誓いあつた。

◆テレビ東京取材◆  
戦争と平和をいま福竜丸と共に考えたい ―と東京都広報部の提供番組「東京レポート」(毎週金

この七年で私は思いもかけぬようなことを経験し、たくさんの人々と会いました。また、この館を訪れる時、私はどのようになっているのでしょうか。また、世界は、世界の「核」はどうなっているのでしょうか。それはその時にならなくては判りません。  
どうか、いつまでも、この館を守りつづけてください。いつか、またもうひと回り成長したら、ここを訪れます(独協大学法学部一年 根本弘之)。

曜日テレビ東京放映)の録画撮りが八月二日・三日展示館で行なわれた。女性インタビュアーと共にくまなく展示館を案内。乗組員大石又七さんは船内で事件当時を語り、三宅雄雄会長が、いま第五福竜丸が訴えかけるもの、展示館の意義について語った。八月十五日午後四時12チャンネルから放送。  
◆原爆忌東京俳句大会◆  
八月十日、第17回原爆忌東京俳句大会がひらかれ、平和協会も協賛。全国から寄せられた千四百句の中から、群馬の村松敏子さんに第五福竜丸平和協会賞が贈られた。南瓜煮で戦ざらいを押しとおす

## 編集後記

▼山下先生は高知県内だけではなく、大分、鹿児島、焼津まで足をのばしていた。「焼津では久保山すずさんにもお会いしてきた。久保山さんの家にはいろいろの木が植えてあるが、愛吉さんが育てていた木もあるそうです。どれかいただいて、展示館に植えられるかどうか―山下先生は記念の写真を見せてくれたが、そう言った。写真は笑顔の山下先生の横で、すずさんもやさしく微笑んでいる。展示館と焼津の距離がまた一歩、縮まったような気がしてきた▼中村まで行きながら、日本一の清流と、今話題の四万十川を目にするのも出来なかったが、初めての高知行は充実した旅であった。運動が広がる時、そこには人を感動させるものがある(は)。

### ●100万人参観者運動を!

86年7月	来館者数	5,411名
通算1カ月	平均来館者数	5,410名
当月1日	平均来館者数	200名
通算来館者数		659,997名

### 青年の死、無言で背中を押す力に 困難な中で進む、高知県ビキニ水爆実験被災 追跡調査——初の健康相談会も実施

山下正寿宿毛工業高校教諭に聞く

一日しか時間がとれない。それも、高知市内から土讃本線終着の中村まで、急行で片道二時間かかる。それでも、「高知へ行こう」という気持ちに駆り立てられた。一ヶ月前、ちみ夫人の手紙によって、長崎の平三義さんの死を知った。平さんの死は、時間は待ってくれない。ことを、改めて実感として思い知らされた。『行きたい』、思いながら、足を踏み出せずにいた私に、平さんの死は大きなはずみとなった——高知でビキニ被災船の追跡調査が始められて、一年が過ぎていた。

◆ ◆

高知の追跡調査は高校の先生方によって始められた。高知県幡多地区では「高校生平和ゼミナール」という学習交流組織がある。自分の足元から平和の問題を考えようと、夏休みの地域調査を中心に活動して入手した、追跡調査の基礎資料を広げる山下先生（高知県宿毛市山奈の自宅にて）。



動を行なっている。三年前に結成され、現在約四十人の高校生が参加している。被爆四十周年の昨年は被爆者問題をとりあげ、生徒たちに出す資料の事前調査をしている時、長崎とビキニの二重被爆の可能性のある青年(当時二七歳)の自殺や、太平洋で実習生として操業していた室戸岬水産高校生(当時二二歳)が急性白血病で死亡した事実を耳にする。二つの事件の解明を求めて調査する中で、先生方は、ビキニ事件の問題の大きさ、深さを初めて知る。そして、

被災船は第五福竜丸だけでなく、八五六隻(54年12月末)におよび、内二七〇隻は高知の船であること。同時に放置されてきた乗組員の存在を。十月、「ビキニ水爆被災調査団」を正式に発足させ、本格的な調査活動を始める。調査をすすめる中で、推定される二八〇〇人の高知県下の被災漁船員の内、これまでに約百人の消息をつきとめた。内、四分の一が死亡(死因の多くはがん)。生存者の多くも内臓疾患や関節の痛みなどを訴えていた。健康診断を求める声も高かった。調査団は今年の四月、ビキニ事件以後、全国でも初めての被災船漁船員の健康相談会を土佐清水で実現させ、十名の受診を行なった。これまでも被災船の追跡調査は、

個々の新聞記者、ルポライター、船員によって行なわれてきた。その中でも弥彦丸、神通丸の追跡調査は大きな反響を呼びおこしたが、今回のような大がかりな追跡調査は初めてである。高校の先生方によって始められた調査活動が、多くの協力者を抱込みながら、運動として広がってきた。秘密は、何んだらう。私は中心となって調査をすすめてこられた山下正寿氏(宿毛工業高校教諭)に直にお会いして、話を伺いたいと思った。 ◆ ◆

「夏休み中も八月七日から九日まで、室戸まで行き、合宿しながら調査活動をする。足元のものを見るという関心は高いですよ。身近に関係者がいるその驚きは、すぐくひきつける。僕らも流れがあったからわかったわけで、たとえ二重被爆者がいたということも聞いても、これまでの土台がなかったら、ああ、そう、位ですんでいたでしょうね。関係者が地域に思いが、ずうっとこの問題を深く言うなればしつこく追求してきた」

「一回は是非、室戸でやりたい。出来れば被爆問題を取り組んだ経験のある専門家に来てもらい、診察してもらいたい。自分たちが調査に入る前は、福竜丸以外の被爆者はいないと、どこに行っても断定された。自分たちは、十分に疑いがある、ありうるんだということを前提に調査をすすめてきた。結果は、自分たちで考え、想像していた以上だ。今後は、科学的裏づけとなるアンケート調査も同時に行なっていくたい」

「七月十九日、全国的に梅雨明け宣言が出された真夏日の中、私は初めて高知に立ち、山下先生の住む宿毛市に向かった。以下は、山下先生とのインタビューの一部である。八秦 小夜子」

「自殺した青年のお母さん(84)は、自分が死んだらこれを見せたいと日記を書き残している。日記には、長崎で被爆したことや核戦争についての思いが綴ってある。そういうひっそりと重い歴史を背負って、だけどわからず死ぬんではなしに、何とか一石投じたという思いがあるんですね。死を無駄にしないという気持ち、残

された人の思いを自分たちが多少かわってやれたということでは——」

「公的資料が少ないということ。僕らが正面から調べても出てこない公的資料を、今後平和協会などで集めてほしい。同時に、当時の関係者、科学者なども持っている資料を、是非、提供してほしい。そして、もうひとつの追跡調査の困難さは、乗組員が全国に散らっているというところ。そういう面からも、全国各地で調査が行なわれれば、全体の調査が飛躍する。僕らの持っているものはほとんど出ず。相手が大きいので、協力してくれる人には、どんどん協力してほしい」

「関係者の反応はどうですか。」「健康相談会に参加した漁船員の人は、その後どうですか。」「これまで本人自身が気づいていなかったが、健康診断などする中で意識が変わってきている。今、高知県被災漁民の会を作る呼びかけの準備をすすめている。反応は積極的だ。切実だから。漁協、船主組合なども、自分たちの関係者の問題として、取りこんでくれた

「科学的裏づけとなるアンケート調査も同時に行なっていくたい」

「八月に代表者がマージナルに行かれるそうですね。」「科学者の入れる本格的調査の土台、きっかけを作りたい。それと、僕ら自身が向こうに行つて見て、感じたりしたこと、もう一回振り返って、日本の被爆者者の問題を見直したい。本当は地元調査に時間をかけたいんですが、自分たちの調査をもっと確かなものにするためにあえて行く」

### 消えることのない平三義さんの訴え ビキニ被災船「弥彦丸」、元乗組員の死に思う

津田邦宏(朝日新聞西部本社社会部記者)

ビキニ被災船「弥彦丸」の元乗組員、平三義さんが今年一月になくなられたことを、つい最近知りました。一度は平さんの訴えを取材した私にとって、原爆手帳の交付を受けられないまま逝った無念さと思うと、悲しみに申し訳なきでいっぱいです。

被災当時の細かい状況を話してくれました。その話を核にその後の「弥彦丸」乗組員の追跡調査が可能になったのです。平さんは他の仲間の消息をほとんど知りませんでした。私たちの記事が運動の一助になれば、という思いでしたが、平さんの死に接して、私たちの取材後のフォーローのなさを改めて痛感、反省しています。『弥彦丸』の手づくりの模型がありました。その模型を見つめる平さんの目にあつた、生ある限り訴え続けるという執念をいまでも覚えていてます。被災船の追跡調査

「若い青年が死んだということが僕らが調査で何度も困難にぶつかった時に、無言で背中を押す力になっていた。教師の特別の感情かもしれないが、許せんという気持ちがあつた。未来ある青年がまるで犬の子が死んだように葬り去られて。それを家族に変わって調べたいという思いがうんと強かったですね」

平さんにお会いしたのは、もう七年前になります。長崎県・口之津町のみかん畑の真ん中にある家で親切に接待してくれました。毎月二回、バスで一時間の病院へ通うなどが弱っているにもかかわらず、昭和二十九年の「弥彦丸」

「八〇年一月一日付朝日新聞(九州版)が弥彦丸の追跡調査結果を発表。疑しきは救済を」と訴え、関係者に大きな反響をよぶ。津田記者はその時の追跡調査のメンバーで、今回、追悼文、を寄せて下さいました。

「高知県ビキニ水爆実験被災調査団では、これまでの中間報告として資料集を発行しています」